

# 連想関係からみた学習観の構造

高山草二\*

Soji TAKAYAMA

Structure of Learning Conceptions Considered by Associative Relations

## 要 約

学習観を分析する新しい方法として、学習に対する連想語を収集し、その頻度データに基づいて、最適尺度法とクラスター分析を用いて、学習観の構造を検討した。その結果、「生涯学習」「受験教育と学校」「成長と向上」「持続的練習」「探求」「積み重ねによる成果」「学校外の学習」「学習のリソース」「勉強」などの学習観が明らかになった。学習に関連する語句を列挙するという、類似の方法を用いた中国とアメリカの学習観の分析結果と比較し、連想関係からみた日本の学習観の特徴を分析した。その結果、日本の学習観は中国のそれと共有する部分もあるし、アメリカのそれと共有する部分も見られた。しかし、日本のみに見られる独自の学習観も明らかになった。

その一つは「持続的練習」と「積み重ねによる成果」である。これらは継続して練習し、習い学び取ることや、長時間の積み重ねが成果、成績に結びつくという考え方であり、「模倣と習熟」を特徴とする日本の学習文化を背景としていると考えられる。もう一つは、「学校外の学習」であり、「試験」と結びついた「塾」を中心とした捉え方である。これらは連想頻度も高い方であり、日本の学習観の中に占める比重も大きい。日本における、学校外の学習システムが発達している教育制度の特徴として考察した。

[ キーワード：学習観、連想語、文化比較、クラスター分析、最適尺度法 ]

## はじめに

学習に対する考え方、捉え方を学習観という。学習観は「学習とはどのようなものか」という問いに対する答えである。これは、人が個人的な経験から自分自身で作上げたものであり、意識的ではないかもしれないが誰もがもっていると考えられる。その意味で学習観は素朴な理論の一種であるが、人を強力に縛るものであり、様々な影響をもたらすと考えられる。人のもつ学習観がどのようなものであるかを明らかにすることは、教育、学習の問題を考えるうえで極めて重要である。

「学習とはどのようなものか」に関する、一般的で包括的な学習観は、主にヨーロッパ文化圏を中心として研究されてきた。その中で、学習観として、「知識の増大」「記憶」「応用」「理解」「見方の変化」「人間の変化」の6つが明らかにされてきた(Säljö,1979; Marton & Säljö, 1984; Van Rossum & Schenk,1984; Marton, Dall'alba, & Beaty,1993; Watkins & Regmi,1992; Marton, Watkins,& Tang,1997)。これらの研究はすべて、面接調査や自由記述を用いた質的な分析法であった。

高山(2000, 2003)は、日本の大学生の学習観について、従来の質的な分析に加えて、学習観の尺度構成を行い、日本における学習観の特徴と学習観の関係構造を実

証的に明らかにした。その結果、「強制・義務」「記憶」という詰め込み的な学習観、「知識の増大」「応用」「体得・反復」など実用的な学習観、「生涯学習」「成長・向上」「主体的探求」など自律的・充實的な学習観、そして「自然な習得」という偶発的な学習観を見いだした。この中で、「体得・反復」「自然な習得」「生涯学習」「強制・義務」など、欧米文化圏では明確には表われていない、日本に特有な学習観の存在を明らかにした。

学習観は、人が経験から独自に作り上げてきたものであり、当然、教育文化環境がかかわっているはずである。上述のヨーロッパ文化圏とは異なる文化のもとでは、学習観の内容に差異のあることが明らかになってきた。

Li(2003)は従来の方法と異なり、学習に関連する語句を収集し、これに基づいて学習観の分析を行い、中国とアメリカの文化差を検討している。具体的には各文化圏それぞれで3人の大学生に、「学習」の諸側面を表す語句をブレン・ストーミングによって挙げてもらった。その結果を他の被験者によってさらに拡張して、最終的に学習との関連性が一定水準以上の語句を、アメリカ203項目、中国225項目残して分析の対象とした。

これらの語句を一つずつ記入したカードを用意し、新たな100人の学生に、これらのカードを類似度に従って分類してもらった。分類のやり方に関しては全く自由で

\* 島根大学教育学部心理・発達臨床講座

あり、いくつかのグループにわけても良かった。分類課題の結果の類似度に基づいてクラスター分析を行い、学習の捉え方の構造をアメリカと中国で比較検討した。

アメリカの学習観は以下のようになった。

#### 学習過程

##### 学習者の特性

- (1) 学習の過程 (70項目)  
欧米学習観の基礎 能動的な心的過程や探求活動  
能動的学習 思考 探求 コミュニケーション
- (2) 個人的特性 (34項目)  
認知技能 動機 創造性 知能
- (3) リソース (24項目)  
指導法 学習ツール
- (4) 発達の基礎 (17項目)  
初期発達段階 人生の過程 他の経験

##### 社会的文脈

- (5) 学校の種類 (12項目)
- (6) 教育者 (11項目)

#### 学習内容

- (7) 学習科目  
基礎 学校科目

中国の学習観は以下のようになった。

#### 望ましいアプローチ

##### 知識の探求

- (1) 学習への情熱 (好学心) (64項目)  
生涯続く追及 勤勉・苦難・不動性・集中 謙遜  
願望
- (2) 学習方法 (34項目)  
理解 活動 応用
- (3) 学習の目的 (27項目)  
目的としての学習 地位 社会への貢献
- (4) 教師・生徒の関係 (16項目)

##### 達成

- (5) 進路-道具 (9項目)  
学業達成の社会的に定着した段階 (例; 大学入試)
- (6) 知識を表現する語 (6項目)  
知識を表現する方法
- (7) 達成の種類 (32項目)  
広さと深さ 特別な能力 知ることと道徳性 独  
創性
- (8) 博識 (7項目)  
多くの学習を達成した人への敬意

#### 望ましくないアプローチ

- (9) 学習の否定的側面 (30項目)  
表面的 願望の欠如 無知

この結果、中国とアメリカで学習観にかなりの差が見られた。上位の2つの概念について、アメリカは相補的なもので価値中立的だが、中国は対照的で一方 (望まし

いアプローチ) に肯定的な価値があった。アメリカでは学習の目的に言及するものがなく、教師と学習者との関係には焦点化していない。学習への情熱は中国においては重要性の高いものであった。アメリカでは学習者の精神的機能と、それに関係する学習過程について詳しく述べているが、中国人は学習における徳や態度や行動原理を強調している。「達成」の基本的なグループのほとんどの項目が、アメリカにはどこにもなかった。

従来、学習観の分析方法としては面接法と自由記述、質問紙形式の尺度が使われてきた。Li (2003) は上記のように、学習に関連する語句を被験者に列挙してもらい、それらの類似度データから学習観を分析する方法を用いた。

そこで、本調査でも新しい測定方法として、Liと同じく学習に関連する語句を分析するが、意識的に関連する語を列挙するのではなく、自由連想によって関連語句をとり出す方法を試みた。そして意識的な類似度判断ではなく、連想語の頻度データを分析して、学習観の構造を明らかにする。連想語を用いる方法は従来の方法と異なり、意識的ではない無自覚な学習の捉え方を引き出せると考えた。

そこで本研究では、日本において、学習に対する連想語を求めて、学習観を探るとともに、その結果を、関連した語句に基づく方法としては類似した研究であるLi (2003) の結果と比較する。これを通して、中国とアメリカの学習観との比較における日本の学習観の特徴を明らかにしたい。

## 方法

**調査対象** 被験者は大学生104人、男子が34人、女子が70人であった。このうち、2回生31人、3回生68人、4回生5人であり、3回生が中心であった。無記入の2人のをぞいた102人を分析対象とした。

**手続き** 「学習」を刺激語として、この言葉から連想する言葉を自由に記述してもらった。一つの講義において集団で調査を行った。

## 結果と考察

分析に用いた連想語の総数は614個であった。連想語を整理して分析の見通しを改善するため、同種の語句を一つの語に置換する手続きを行った。例えば、「教科」「科目」「必須科目」「国語」「算数」などは「教科」としてまとめた。出現頻度が5以上の連想語を分析の対象として、最適尺度法を用いた。次にこれから得られた成分スコアをもとに、階層的なクラスター分析 (最遠隣法) を行い、学習観の構造を導いた。

クラスター分析の結果は以下のようになった。ここで、数字は各連想語の出現頻度である。また、括弧内は類似

の連想語としてまとめたものである。

## I 自主的学習

### (1) 「生涯学習」

「勤勉」

教材 7項目 (教材、プリント、学習材料、ワークブック、問題集、参考書)

勤勉 6項目 (地道、コツコツ、勤勉、忍耐、根気)

「生涯学習」

生涯学習 17項目

自習 5項目 (自習、自主学習、自由学習、自由課題)

## II 社会的文脈

### (2) 「受験教育と学校」

「受験制度と暗記」

教科 11項目 (教科、科目、必須科目、国語、算数)

受験 14項目

記憶 19項目 (暗記学習、暗記、記憶、暗唱、覚える、詰め込み学習)

「生徒と先生」

生徒 12項目

先生 25項目 (先生、教師、教授)

「学校」

教育 15項目

学校 40項目 (学校、小学校)

## III 成長と探求

### (3) 「成長と向上」

「成長と知識」

成長 5項目 (成長、成長のための手段、視野拡大)

知識 16項目 (知識、知識の受容・獲得)

「能力発達」

能力 15項目 (能力、知的能力、学習能力、知能、学力、理解力)

生涯 8項目

「自律性と向上」

興味関心 8項目 (興味、関心、好奇心)

向上 8項目 (向上する、向上心、向上、進歩、発達、発展、上達、前進)

自発性 8項目 (自発性、自発的、自発的行動、自主性、自主的、自分でやる、自立)

### (4) 「持続的練習」

「学習への情熱と苦難」

苦痛 9項目 (苦しい、つらい、きつい、苦痛)

意欲 7項目 (意欲、やる気、動機づけ、熱心、積極性)

「継続的練習」

練習 5項目

持続 9項目 (継続、持続)

「習い事」

習い事 6項目 (習う、習い事)

学ぶ 11項目 (学ぶ、学び取る)

### (5) 「探求」

「知的探求」

探求 22項目 (探求・追求、発見、問題解決、創造、発想、問題・疑問)

思考 10項目 (思考、考える、理解、認知)

「実践的探求」

実験・観察 7項目 (実験、観察、調査)

経験 6項目 (体験、経験)

### (6) 「積み重ねによる成果」

「積み重ね」

積み重ね 6項目 (積み重ね、段階的、着々)

時間 7項目 (時間、長時間、学習時間、時計)

「成果」

成果 7項目 (成果、結果、効果、学習効果)

成績 9項目

## IV 勉強

### (7) 「学校外の学習」

「塾」

机 17項目 (机、学習机)

宿題 14項目

塾 23項目

「試験」

予習・復習 20項目

試験 19項目 (試験、テスト)

### (8) 「学習のリソース」

「書物と努力」

本 13項目 (本、書物)

努力 21項目 (努力、地道な努力、頑張る、一生懸命)

「学習環境とツール」

筆記具 8項目 (鉛筆、筆記用具、文房具、筆)

ノート 12項目 (ノート、学習帳)

教室 5項目

教科書 13項目 (教科書、テキスト)

### (9) 「勉強」

「反復」

習得 6項目

反復 13項目 (繰り返す、反復)

「勉強」

授業 14項目

勉強 46項目

以上の分析の結果、日本の場合、学習観は大きくは「生涯学習」「社会的文脈」「成長と探求」「勉強」の4つに分かれた。

(1)「生涯学習」は教材と勤勉さと自主的学習が結びついたものである。この学習観は中国の「生涯続く追求」と類似しており、付随している「勤勉」も対応している。

しかし、アメリカには「生涯学習」に対応する学習観は見られない。

(2)「社会的文脈」は受験教育と学校というテーマである。この中の「受験制度と暗記」は一部中国の「達成」の中の「進路・道具」に対応する。これらはアメリカの

学習観にはみられない。

日本の「教科」がアメリカの「学習内容」の「学校科目」に対応する。また、「学校」は中国では見られないが、アメリカでは社会的文脈の「学校の種類」と対応する「生徒と先生」はアメリカの「教育者」と重なるが、中国の「教師・生徒の関係」のように、両者の関係までは含んでいない。

「成長と探求」の中の(3)「成長と向上」は「成長と知識」「能力発達」「自律性と向上」を含んでいる。「成長と知識」はアメリカの「人生の過程」に対応するが、中国の「学習の目的」の自己完成への道に近いかもしれない。

「能力発達」は能力を含んでおり、アメリカの「個人的特性」のいくつかに対応する。「自律性と向上」は興味や向上心、自発性を意味しており、中国には見られず、アメリカでも「動機」が一部対応するに過ぎない。

(4)「持続的練習」には、「学習への情熱と苦難」「継続的練習」「習い事」が含まれている。「学習への情熱と苦難」は中国の「学習への情熱」と付随する「苦難」が良く対応しているが、アメリカには見られない。「継続的練習」と「習い事」は中国やアメリカには明白には見られない。

(5)「探求」は「知的探求」と「実践的探求」からなる。「探求」はアメリカの「学習の過程」の中に存在するが、中国では「達成の種類」の「広さと深さ」が関係する。

(6)「積み重ねによる成果」は「積み重ね」と「成果」からなるが、いずれもアメリカと中国には見られないものである。

「勉強」の中の(7)「学校外の学習」には「塾」と「試験」が含まれる。これらもアメリカと中国には見られない。

(8)「学習のリソース」は「書物と努力」「学習環境とツール」からなる。「学習のリソース」に関してはアメリカで「リソース」中の「学習ツール」に対応し、中国の「進路-道具」に重なる。

(9)「勉強」は「反復」と「勉強」からなる。これらは中国の「勤勉」や「集中」に近い概念である。しかし、アメリカには明確に対応する概念はみられない。

中国の「学習方法」と「学習の目的」は日本とアメリカで明確には現れなかった。アメリカの「学習者の特性」の「コミュニケーション」、「リソース」の中の「指導法」「初期発達段階」「他の経験」は日本と中国で明白には見られない。「創造性」「独創性」はアメリカと中国には見られるが日本に現れていない。

日本の学習観は中国のそれと共有する部分もあるし、アメリカのそれと共有する部分も見られた。しかし、日本のみに見られる独自の学習観も明らかになった。

日本独特の学習観は「継続的練習」と「習い事」、「積み重ねによる成果」である。これらはともに、成長と探求という大きなクラスターに含まれている。

これらは継続して練習し、習い学び取ることや、長時

間の積み重ねが成果、成績に結びつくという考え方である。日本の学習文化として「模倣と習熟」があるが(辻本,1999)、この学習観はこのような学習文化を背景としていると考えられる。この学習観は質問紙尺度による結果でも「体得・反復」として現れていた。

日本独自の学習観のもう一つは、「学校外の学習」であり、「試験」と結びついた「塾」を中心とした捉え方である。これらは連想頻度も高い方であり、日本の学習観の中に占める比重も大きい。学校外の学習システムが発達している、日本の教育制度の特徴が表れたものといえよう。

Li (2003) は、学力の国際比較におけるアジア圏の子どもの高成績 (Stevenson & Stigler,1992) の原因として、学習の意味するところが文化によって異なるためではないかと考えている。しかし、日本の学習観はアメリカのそれと類似している側面も多かった。今後の検討が必要であろう。

学習観尺度を用いた高山 (2000) の9つの学習観と比較してみると、「応用」「自然な習得」が連想語の本研究には明確な形で現れていなかった。意識的、自覚的な尺度と非意識的、無自覚的な連想語に基づく場合の差異が生じていると考えられる。

## 文献

- Li, J. 2003 U.S. and Chinese Cultural Beliefs about Learning. *Journal of Educational Psychology*, 95, 258-267.
- Marton, F., Dall'alba, G., & Beaty, E.1993 Conceptions of learning. *International Journal of Educational Research*, 19, 277-300.
- Marton, F., & Säljö, R. 1984 Approachs to learning. In F. Marton, D. Hounsell & N. Entwistle (Eds.) , *The experience of learning*. Scottish Academic Press. 36-55.
- Marton, F., Watkins, D., & Tang, C. 1997 Discontinuities and continuities in the experience of learning: An interview study of high school students in Hong Kong. *Learning and Instruction*, 7, 21-48 .
- Purdie, N., Hattie, J., & Douglas, G.1996 Student conceptions of learning and their use of self regulated learning strategies: A cross cultural comparison. *Journal of Educational Psychology*, 88, 87-100 .
- Säljö, R. 1979 Learning in the learner's perspective.I. Some common-sense conception. Reports from the Development of Education, University of Goteborg, No.76.
- Stevenson, H. W., & Stigler, J. W. 1992 The learning gap. John Brockman Associates, Inc. 北村晴郎・木村進 (監訳)「小学生の学力をめぐる国際比較研究」

金子書房.

高山草二 2000 大学生の学習観の特徴と構造 島根大学  
教育学部紀要 (人文・社会科学) 34, 1-10.

高山草二 2003 学習観とその規定要因および学習方略と  
の関係 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)  
37, 19-26.

辻本雅史 1999 「学び」の復権—模倣と習熟 角川書店

Van Rossum, E. J., & Schenk, S. M. 1984 The  
relationship between learning conception, study  
strategy and learning outcome. *British Journal of  
Educational Psychology*, 54, 73-83.

Watkins, D., & Regmi, M. 1992 How universal are  
student conceptions of learning? A Nepalese  
investigation. *Psychologia: An International Journal  
of Psychology in the Orient*, 35, 101-110 .

